

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 盧 姪鉉

盧姪鉉氏の博士論文「日韓コミュニケーション行動の対照研究 ―貸し借り行動・意識に関する調査結果に基づいて―」の審査結果について報告する。

従来の研究で、類似する言語構造を持つ日本語と韓国語においても、言語行動の面では異なる面が少なからずあり、それが原因でミスコミュニケーションが起こること、その背景には相手に対する配慮の仕方や領域意識の違いが存在する可能性が指摘されてきた。このような日韓の配慮の仕方や領域意識が、コミュニケーション行動のどの部分にどのように表われているのか、また、その日韓の相違が何に起因しているのかについては、これまで詳細な分析が行われていない。本論文は、日韓コミュニケーション行動の異同を明らかにし、行動の意識・算出プロセスの側面から相違の原因を究明しようとしたものである。

本論文は8章からなり、まず第1章では、日韓コミュニケーション行動の研究の必要性と研究の背景、および分析の枠組みについて述べている。ここでは、言語表現だけでなく行動意識や無言行動など、言語表現以外の部分も視野に入れて分析することの必要性を主張し、事態把握からコミュニケーション行動産出までの過程を示した「コミュニケーション行動産出プロセス」を仮定している。

第2章では、配慮の仕方や領域意識が窺えやすい場面として「貸し借り場面」を取り上げたことと、それに関して行った3つの調査の概要について述べている。調査1と2はアンケート調査で、調査1では借りる場面、調査2では貸す場面を取り上げ、それぞれいくつかの状況を設定し、その状況での行動や表現を調査している。調査3では行動の背景にある意識を探るためにグループ式面接調査を行っている。

第3章では、借りる場面を取り上げた調査1の結果を、行動の切り出し方と談話構造の側面から分析している。考察の結果、行動の切り出し方については、相手が家族の場合に日韓の違いが見られ、日本では借りながら一言言うことが多いのに対し、韓国では何も言わずに使うことが多いことが明らかになった。談話構造の側面では、[恐縮][情報提供]の使用は、全体的に韓国より日本の方が多く、日本より韓国の方が母、弟・妹に対して[注意/通告]の使用が多いことなどを明らかにしている。

第4章では、同じ調査1の結果をもとに、談話の中心である[依頼]部分について、表現類型と述部の表現の側面から分析している。表現類型の側面では、相手が「親・上、親友、母、弟・妹」の場合に日韓の差が多く見られ、日本は<疑問><行為要求>が主な表現類型となっているのに対し、韓国は<疑問>の他に<意志><勧誘>の使用率が高いこと、本動詞と補助動詞の側面では、日本はほとんどの人が本動詞に三項動詞を用いて貸し借り関係を明示しているが、韓国は二項動詞を用い貸し借り関係を明示しないことが多いこと、さらに、補助動詞として授受表現を使用する割合は、韓国より日本の方が高いことを指摘している。

第5章では、貸す場面を取り上げた調査2の結果を切り出し方、談話構造、表現類型、述部の

表現から分析している。その結果、切り出し方、談話構造、本動詞、補助動詞に関しては日韓に大きな違いは見られず、表現類型の側面で、日本は状況や相手を問わず〈疑問〉を用いることが多いのに対し、韓国は初対面の人には〈疑問〉を用い、親・上、親友、母、弟・妹には〈行為要求〉〈勧誘〉を多く使用するという違いが見られた。

第6章では、領域を意識した行動と見られる側面、つまり切り出し方、表現類型、本動詞、補助動詞について、調査1、2の結果を改めて分析し、日韓の異同について考察している。その結果、貸し借り場面における日韓コミュニケーション行動の全体の様相を見ると、相手の領域に立ち入る際、日本は切り出し方・表現類型・本動詞・授受表現の側面において、領域意識を強くはっきり示しているが、韓国は示し方が弱いと考えられると指摘している。

第7章では、調査1、2の結果と調査3の面接調査の結果をもとに、貸し借り場面のとらえ方や貸し借り行動の遂行・評価意識に注目して考察している。分析の結果、貸し借りの実行において、韓国は「相手」という要素が特に大きく影響するのに対し、日本は「相手」だけでなく様々な要素が影響していることが明らかとなり、これが日韓の相違を生み出す大きな要因ではないかと指摘している。さらに、日本人は「お互いの領域を守りたい／侵されたくない」と思いがあるのに対し、韓国人は「お互いの領域を感じさせまい／共有しよう」という思いが見られ、このことから、日本人の失礼にならないよう行動しようとする心的態度、韓国人の水臭くならないよう行動しようとする心的態度が窺われると重要な指摘を行っている。最後に、この研究で明らかとなった日韓の相違は、コミュニケーション行動の産出プロセスの〈要素間の優先順位の調整〉、〈行動指針・遂行イメージ〉、〈コミュニケーション行動の選択〉の各段階での日韓の相違が反映されたものであることを明らかにした。

第8章では、結論と今後の課題を述べている。

本論文は、「借りる場面」「貸す場面」双方の言語行動を、切り出し方、談話構造、表現類型、述部の表現という様々な面から分析・考察を加え、日韓のコミュニケーション行動の異同を詳細に明らかにしている点で、従来の研究にない成果を挙げており、社会言語学、日本語学、韓国語学、日本語教育の分野において高く評価される論文だと考える。特に、無言行動まで含めた行動の「切り出し方」に注目した研究は本論文が初めてであり、新たな視点を提示したことは大きな功績である。

なお、「貸す場面」と「借りる場面」の違いについて考察が不足している部分があること、日本語教育に利用するにはより詳細な分析が必要であること、など今後検討すべき課題も指摘されたが、それらが本論文の価値を損ねるほどのものではないことが確認された。

したがって、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。